（驛遞局認可）

（日曜日休刊）（定價金二錢）

時事新報

第千四百八十一號
明治二十年一月十日 月曜日
舊丙戌十二月十七日（乙亥）
日出七時十二分 日入五時零四分
月出午後五時三十六分 月入午前六時五十八分
滿潮午前五時三十八分 午後六時零分
（西曆一千八百八十七年）

時事新報定價
一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓
〇時事新報社ヨリ直ニ郵便ニテ發送スルモノニ限リ本文定價ノ外ニ一箇月二十六錢ノ郵税料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金一行ニ付

一行廿四字詰	一日限	二日以上六日迄	七日以上十五日迄	十六日以上
自一行至十行	十錢	八錢	七錢二厘	六錢八厘
自十一行至三十行	九錢	七錢	六錢三厘	五錢九厘五毛
三十一行以上	八錢	六錢五厘	五錢八厘五毛	五錢五厘

時事新報

英國商人に一振を望む

英國は由來久しき商賣國にして世界到る處其商域甚だ廣く其規模の廣大なる固より他國の敢て企及する所に非ずと雖ども人情の自然、得意自滿の極、近來に至りては其一部分に於て少しく腐敗を生じたるの氣味なきに非ず例へば支那の商賣に於ても香港より天津に至るまで沿海一帶の商賣は英商人の掌握する所なれども又た一方を顧みれば英商人は一般に不活潑にして大店を構へ体裁を飾り衣食住を美にし遊嬉に耽りて所謂紳商を氣取るが故に兎角費用倒れとなりて其商賣品自から廉ならず之れに反して彼の獨逸商人は店舗の体裁等は相應に飾れども其内部の生活は至て質素勤儉にして衣食は粗薄に使丁の數は甚だ少なく隨て其商品廉價なれば英國商人は次第に其商域を蠶食せらるゝの趣ありて現に香港などにては英商人は數漸く減じて獨逸商人の數漸く増加するの勢ありと云ふ又北支那の商賣を見るに英商人の氣力は案外に乏しく開平天津間の鐵道工事請負は獨逸のクルップ商會に奪ひ去られ其他諸般の商業に於ても着々後進生なる獨逸商人に壓倒せられんとするの趣なるが如し次に眼を轉じて我日本國の商賣を見るに獨逸人の設立に係る商會は鐵道レール其他各般商品の買込方に手を廻はして拔け目なく立廻はるが如くなれども英國商人は香もなく臭もなく唯居留地内に籠城して年來の商賣取引を守るのみにて新に販路を開かんともせず新に商賣上の事業を起さんともせず口さがなき江湖の人をして英國商人は或は老耄したるかの評を下さしむるに至りたるは我輩の英商人の爲めに痛惜するところなり

然りと雖ども英國は由來久しき商賣國なり今日の處にて其一部分を見れば或は聊か腐敗したるが如く思はるゝ處もあらんなれども商賣起業は英國人祖先傳來の秘事にして容易に他國人の企て及ぶ所に非ざれば加へて其商人社會には大資本の運轉機十分に備はるが故に一朝自から發奮して大業を經營せんとするときは何を爲すとして成らざらん彼の一時の氣勢を以て英國商人は老衰したり腐敗したりと評し漫評するものは忽ち其言と正反するの日あるやも容れざるなり左れば在東洋の英國商人は一たび奮勵して平生の神髓秘骨を發揮し大事業を計畫して其規模の果して廣大無邊なる所を世人に示し以て其誣を解かざる可らず而して其誣を解くの期は今方に到來したるものゝ如し何を以てか之を言ふとなれば今や我國と締盟各國とは條約改正の事ありて不日其談判相結すれば治外法權の撤去と共に外國人の内地雜居を許すは必定、斯くなる以上は日本全國は開け放しの姿にて富源は人の探るに任せ遺利は人の拾ふに委し資本あるものは内地に入りて鑛山を開き蠶糸業を起し木綿羊毛麻布織物製造場を設くる等其資本運轉の事業は到る處に堆積するならん此時こそ英商人が其平生の技倆を示すの時なれ殊に據りて顧ふに其商業上の氣力の老てますます壯なるを表せざる可らず聞く所に據れば英國倫敦の諸商人諸工業家は或は此邊に見る所ありてか日本にて條約改正の上外國人の内地雜居を許すに至れば差向き一千萬圓の資本を投じて木綿紡績織物、染物、生糸紡績織物等の製造所を建設し賃銀の廉なる日本人を使役して大に内地需用向き及び外國輸出向きの織物を製するの計畫を爲し居れりと云ふ果して左る計畫のあるや否や我輩の確知する能はざる所なれども世界第一等の商賣國たる英國の商人にして是れ式の計畫なくては叶はぬことなり又聞く所に據れば在東洋の英國外交官は近來英國商人の餘りに落著き過ぎたるを訝り東洋の商人と協力して大に計畫する所ありては如何云々とて内々其旨を勸告する所ありとも云ふ兎に角英國商人は商賣上先進の地位に立つが故に世人の望を屬すること亦隨て大なれば時機を視て其腕前を示し江湖の輿望に稱はざる可らず恰かも好し日本にては今正さに條約改正の事ありて全國開放内地雜居の期も亦遠きに非ざるの運に會したれば英商人は此機會を失はずして今より日頃の腕前を示さんとするの覺悟專一なる可しと信ずるなり

雜報

○米國内地巡遊日誌　此篇は保田細川三宅の三氏が米國内地を巡遊しゝる日誌にて昨年十二月三四の兩日に掲載したる續稿なるが郵船の都合にて今日まで延引したるものなり

十月二十四日　早朝より歩す行くこと七英里時恰も正午なり幸に路傍數丁を隔てゝ農家一戸を認む細川三宅行て麪包を購ひ午餐を終る此時保田は原野中に行々小鳥を獵し居たる爲め先づ細川及び三宅を見失ひ必ず先に進みたるものと信じて足を早めて歩す三宅細川も亦保田のあらざるが爲め先歩を急にして進む日沒に至るも相會せず止むを得ず三宅細川は路傍の柵内に入りテントを張り眠を取る此日米人の旅客と同歩すると半日途々諸事米國の現況を聽くを得たり旅客余輩にブランデー及菓子等を與へたり此日午後の旅程は十英里なり

十月廿五日　三宅細川早朝起きて進み行くこと一英里許路傍に樹洞あり毛布を纏ひ薪を集めて暖を取る者あり近づいて之を見れば是れなん保田にして昨夜此洞中に眠りたりと云ふ其樣奇なるを以て再び其体を演せしめたるに毛布を頭上より被り洞中に坐睡せし体恰も達摩の像に異ならず三人共に大笑したり夫より進むこと八英里にして(Gilroy)ギルロイに達す時既に黄昏依て市街の入口を右に曲り宿るべき場所を求むるに人家綿亘テントを張るに困みたりしが漸く狹き牧場の中央に大なる柏樹のあるを認め樹下にテントを張る此樹年を經る殊に久しく印度蠻民以來のものと思はる然るに今や印度蠻民跡を絶ち白皙兒の遊場と化したるを思へば余等も印度人民の爲めに坐ろに感慨の情を惹起したり是れ必竟智愚賢不肖の然らしむる處吾人の深く慮るべきことなり此夜テント中に於て余等が困難の樣を語り合ひ且つ今日茲に白皙人民が愉快の生活をなし開化の民たるを得るの以前は皆牧畜の野民にして今余等がテント中に起居するが如く不充分なる生活困難なる境涯を經たることも思ひ遣り且天は世界の萬民に何故平等の能力を與へざるやなど嘆じつゝ眠に就きたり

十月二十六日　此日爰に滯留し　ヘンリー　ハロウエー氏を訪ふ氏は北海道鐵道器械師長として明治十三年の冬より同十五年の春まで二年半其職に從事せし人にして能く日本の事情に通じ且つ略ぼ日本語を解す然るに氏は折節不在なるを以て空しく歸る晩景に至り氏余等がテントを訪ひ來り且つ菓物菓子等數多携へ來りて余等に與へたり即ち氏をテント中に招き四方山の談話をなし且余等が漫遊の故を語る氏感激余等に向て種々米國の農況を說明せり（ギルローイは人家凡八百餘戶可なり繁華の市街にして人民多くは着實の樣に見受たり此地レパブリカン黨盛にして其機關たる新聞紙一箇あり市街を東に曲ること十四英里に温泉あり暑中は浴客殊に多く隨分有名の温泉なり日本人の此地に働くを取るもの二三人あり）

十月二十七日　朝ハロウエー氏來り今午後六時自宅へ來談すべき由を告げ去る此日終日獵銃を携へて田野を奔走し農牧の盛況を實見したり抑米國農業の樣は我日本の如く些々たるものにあらざること勿論なるが一農家の所持する處四五英方里餘の廣き田野にして隣家と云ふも數英里を隔つ而して適々農家便利の爲に設る都府の外は絕て村落の如きものを見ず事業の盛大にして規模の廣濶なる實に驚くべきものあり余等米國農業の樣を實見して以前にありては我日本程農業の進步せし國は稀なるべしと信せしに今日此農況を見るに中々我國の遠く及ばざる處にして山頂廣原處として麥の刈跡ならざるはなく凡寸地を餘さずと云ふも蓋し不可なかるべし而して土地の價は大概一エークルに付八十弗乃至百六七十弗なり小農と雖ども其耕す處一家凡二十エークルに下らず思ふに追々麥蒔の期節に至らば此廣濶の原野を一時に耕して一時に播種する其盛況は今日豫想の外に出づるなるべし元來米國の農は我日本の如く悉く人力に依るものにあらずして總て其力を馬に籍り其用を器械に藉るもの多く人力を用ゆること殊に少なくして業となすこと甚だ多し是れ米國が僅少の人口を以て此大國を支配して寸地も餘さゞる所以なり若しも我國の如き農業ならしめば恐くは世界中の人口を移すも其過多を感ぜざるべし却說此夜ハロウエー氏の宅に到り種々の談話をなして晩餐の饗應を受けて歸る話中我日本政府より賞狀滿期狀等を示したり歸路市街に散步を試む此日はレパブリカン黨有名の辨士某氏の演說ありて其景況を添へんが爲め市街中央に於て煙火を打揚る等市中殊に賑はしく見受けたり

十月二十八日　午前獵銃を携へて原野を廻はり農牧の樣を實見す此日彈丸盡くるを以てテント内にて新に百發を調製す

十月二十九日　ハロウエー氏の知人なる某の設立するチーズ製造所に赴きチーズの製造を實見したり元來チーズは西洋人は殊に嗜みて之を食するも日本人の口には適せざるものと見へ日本人の之を嗜むもの甚だ稀なり且吾人は我國に於て此製造は更なり未だ之を見たることもなかりき

十月三十日　此日東を指して發足せんと欲せしも午前二時頃より降雨襲ひ來り進行し難きを以て滯留を決し夫より降雨一層甚しくテントを透して我寢を侵し來り我居を濕ほすこと大方ならず甚だ困難を感じたり此日の雨は余等旅行中第二回の攻撃にして初回に比すれば一層甚しかりしも一度の經驗あるときは前回程の困難はなかりし日暮に至り雨漸く晴れ再び青天と見ることを得たり實に愉快なりき

十月三十一日　此日晴天なれども昨日滯在したるテント毛布及び其他の旅具を乾したるが爲め遂に發することを得ざりき此日は日曜日なれば滯留中に知友となりし白人等交々來りて寺院に禮拜せんことを促す三宅細川はつれてプレスビテリヤン　チャーチ　に到る此日の說教は太平洋(The Pacific Ocean)と題して社會は恰も太平洋の如し而して人間の社會に處するは恰も船の太平洋中に進行するが如し船其方向を定めざれば洋中に漂ふべし之と同じく人間の社會に處する亦其進路を定めざるべからず若しも人間が進路を定めざるに於ては常に社會の波に漂ふならん而して進路即ち目的とすべきものは神なりと云ふの主旨にて例を理學上或は歷史上に取り爽快に辨說したり

十一月一日　此朝市街に赴き數日間の食品を準備し且

つ旅具の重きを
一箇を購ひ九時
よして長き小家
は寒と同じ長さ
の飲料に供す水
れより進むこと
ントを張る此時
り來るあり種々
前途より歸り左よ
テント中に入る
十一月二日　早
歸ると三英里餘
と八英里餘日暮
晩餐の爲め麪包
前其夫と共に世
ある趣にて東京
し由を語り且甚
々余等を食室に
種々談話せんと
て面話するを得

○朝鮮遊覽日誌
南陽（水原
南陽府領は海岸
原廣州兩地に界
内は山岳重疊田
二千六百九十六
なる者少なから
艦の碇泊する所
らず仁川港と共
とも明治十五年
し水原京城江華
で引き上げたり
水軍僉節制使
なり共に僉使を
の管轄する所な
査するに各道に
其一員は監司例
務を掌りその居
慶尙全羅兩道に
す全羅忠淸慶尙
來事は水軍に
ろの水營と統營
ふ各地海岸に各
僉節制使これを
れと守り四は別
事は兵政と
以てこれに任ず
を納ること云ふ
はか傍近郡縣
そ
府領は十三面とあ
實際は四千五百
は昨年の凶作と
らんと云ふ府邑は
圍みたゝ一水東
其溜北山下に在
當邑あり人家五六
麗王ゝに在り南陽
り時に一府使あり
海水退くと凡ろ七
して退潮碑と云ふ
府に通ず余の來路
を經て京城に至る
す西は馬山浦に通
十里にして花梁鎭
て仁川港とす本
一處を存ぜ僧侶一
あり烽燧は念佛
たり當時閔泳翊氏
てこれを見たり其
將校なるとありて此府
は合計代價五錢
ず然るに其外府使